

保育生活に根ざした歌唱活動に向けて —保育者間の対話と協働による実践例から—

津 田 奈保子

1 序論

多くの幼稚園では生活発表会や音楽会が実施され、幼児に適度な刺激を与え発達を促す契機となる。だが保護者の鑑賞を意識しすぎると、行事が知識・技能を「見せる」場へと目的化し、幼児の主体性が損なわれる危険性が指摘されている（虫明 2018・乙部 2022）。幼稚園教育要領（2018）も、行事は幼児の発達や生活を踏まえ、活動意欲や交流を広げることを求めており、音楽活動が幼児の日常生活から遊離しないよう配慮することが不可欠である。

倉橋（2008）は『幼稚園真諦』において子どもの日常や生活を第一に考えることを大切にする意味で「生活を生活で生活へ」と述べ、幼稚園を「子ども自身が自分の生活を充実する工夫を自ら持っていることを信用して、それを発揮できるようにしてやる場所」と位置づけている。つまり保育者が過度に先回りして活動を準備するのではなく、幼児が生活の中で自発的に遊びや学びを見だし、それを展開できる環境を整備することの重要性を示唆している。音楽活動においても、幼児自身の創造的な表現を尊重することに加え、文化の伝承という観点から大人の指導が一定の意義を持つ。ただし、その指導は保育者が一方的に〈歌わせる〉ものではなく、歌を契機として幼児の生活が広がり、仲間との相互作用が深まり、保育者と子どもが音楽を介して生活を協働的に形成していく過程に価値が見いだされるべきである。そのため、保育者間における継続的な対話と協働を通じ、行事に向けた過程においても、保育の生活に根ざした展開が求められる。

本研究では、幼稚園における音楽活動が豊かな保育生活を実現するためにどのような役割を果たし得るかを明らかにする。具体的には、年間を通じて保育者が取り組んだ対話と協働のプロセスおよび具体的な保育実践事例を分析し、その意義を検証することを目的とする。

2 本論

2.1 幼稚園における行事の位置づけと音楽会の現状

幼児の生活においては、日常的に多様な音楽経験が存在している。幼児は原初的な音楽行動を通じて、生活の中で自然にリズムや音楽の表現を見だし、身体を動かしたり、歌を口ずさんだりする姿を示す。多くの幼稚園では、生活発表会や音楽会等が開催されており、幼児・

園・保護者が音を媒介として時間を共有し、幼児の成長を確認し合う重要な場といえる。

幼稚園教育要領（文部科学省，2018）においても「幼児の活動意欲を高め、幼児同士の交流を広げる」ことが期待されている。同様に、大豆生田（2023）は「子どもの声を聴く」ことが「こどもまんなか社会」の中心的課題であると指摘しており、行事においても幼児の主体的な姿が求められる。加えて、岩田（2023）は「行事の経験は生活の流れに変化や潤いを与える」と述べ、行事を通して生活を豊かにする援助の必要性を強調している。

しかしながら、行事においては保育者の援助が一方的な指導となる傾向が指摘されている。乙部（2022）は行事での実践を分析し、保育者が年度初めから曲目を計画することが、その時々熱中する遊びを活動に取り入れる上で障害となり、主体性を十分に尊重できない要因だと指摘する。吉永（2018）は「発表会においては小学校教育を先取りする形で知識技能面を『見せる』傾向」が存在すると述べる。幼児期の音楽活動は、歌唱や演奏の技術習得を目的とせず、社会的関わりや情緒的成長と密接に関連することが示唆される（中村，2018）。

これらの先行研究は、行事が成果発表の場となりやすい現状を示しているが、幼児の日常生活に根ざした音楽会の具体的実践については、検討の余地がある。

2. 2 理想的な音楽会に向けた視座

生活に根ざした音楽会を実現するためには、第一に、幼児が日常生活の中で十分に展開可能な教材の選定が不可欠である。外的な見栄えや成果を優先した教材では、幼児が理解できず主体的な関わりを持つことが困難となる。したがって、幼児にとって無理のない声域や難易度であり、かつ興味関心や生活経験と結びつく教材を選ぶことが重要である。また、乙部（2022）は、生活発表会における準備期間が1か月程度と短く、導入・練習・製作・発表をこなすことが保育者にとって大きな負担であると述べる。この場合、活動は歌詞や旋律の習得に終始し、生活に根ざした音楽活動が十分に展開されず、形式的な再現に留まる危険性が高い。本研究は、歌唱活動における表現は歌詞や旋律をいかに習得させるかが重要であると考え、約2か月間にわたり断続的に取り組み、遊びの中で自然に展開されることを意図した。

さらに、生活に根ざした音楽会を実現するためには、保育者が方向性を見失わないよう、組織的な体制整備が求められる。そのため本研究では、クラス単位ではなく学年単位で音楽会を実施し、学年の保育者間で常に対話と協働を重ねる仕組みを整えた。

2. 3 研究の詳細

本研究の対象は、大阪府内の緑ヶ丘幼稚園である。2024年2月25日に開催された音楽会を事例とし、その約2か月前から音楽会に関連する保育を展開した。音楽会では、《ゆげのあさ》による歌唱活動に加え、手遊びや楽器遊びを実施した。著者は音楽講師として関わった。

研究方法としては、保育者が対話を通じて方向性を確認しながら構想した実践、あるいは

幼児が自発的に遊びとして展開した活動を事例として取り上げる。分析の観点は、①保育者が幼児を中心に据えた音楽活動をどのように行ったか、②その結果幼児の音楽表現がどのように深まったか、の2点である。

研究体制として、以下の取り組みを行った。

1 2023年4月18日：全体研修（保育者13名）において、①幼児の立場に立った音楽活動を行うこと、②表現させる以前に心を揺さぶる経験を重視すること、の2点を確認した。

2 2023年6月23日：橋本主任を中心に、音楽活動に関する悩みを保育者が共有し、KJ法を用いて課題を分類・検討した。年間を通じて6回、園全体で方針を共有する場を設け、学年の保育者間での対話を継続した。

3 2024年3月21日：研究年度の音楽活動、とりわけ音楽会への取り組みを省察し、保育者間で対話を行った。音楽的育ちに繋がった保育事例を「思考力・判断力・表現力の基礎」「知識・技能の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の観点から分類し、音楽活動の意義を整理した。

研究対象は年少児2クラス（各22名）であり、学年単位で音楽会を実施した。年少児を取り上げた理由は、入園直後の3歳児にとっては日々の活動が楽しさと安心感を左右する重要な意味をもち、未知の音楽会への援助の意義が大きいと考えられるためである。題材として選定した《ゆげのあさ》（まど・みちお作詞、宇賀神光利作曲）は、活動の季節に合致し、3歳児に適した声域（mid2C～hiC）であり、歌詞の内容も幼児が十分に理解可能である。さらに、ゆげを汽車に見立てる比喩表現により、詩の美しさと音楽的表現が合致し、幼児の想像力を喚起する教材である。

倫理的配慮として、研究に関して保育者に説明を行い、個人が特定されないことを伝え、同意を得た。また所属大学学科内の倫理委員会にて倫理審査を通過し、継続許可を得ている。

3 結果と考察

3.1 対話と協働を基盤とした研修の展開

4月の時点で先述の2点を確認された。すなわち、第一に幼児の気持ちを理解すること、第二に完成度の追求ではなく、表現の根源となる「心を揺さぶられる経験」を重視することである。新年度の開始直後であり保育者は比較的に余裕を有し、容易に受容した。しかし、理念としての理解が実践へと直結されるわけではない。保育者にとって指導方法の検討は教育実践の質に直結する重要な課題である。理想論を述べるだけでは実際の保育は成立せず、現場で直面する課題への具体的対応が求められる。そこで、6月23日に保育者から提示された悩みについて、それらの問題が起きる要因と具体的指導について議論が行われた（表1参照）。

① 技能・発声・意欲に関する悩み

大声を出す子どもや声を出せない子どもに対して、直接的指導をするのではなく、個々の子どもに潜む思いや状況を汲み取ることの重要性が議論された。協働活動を通じて、保育者間で子どもを冷静に観察・理解する姿勢が促進された。具体的には、日常生活における挨拶や会話、笑いや泣きの際の声の変化に注目し、子どもが声を出す喜びを体験でき、声を通して自己表現を楽しむ心の育成を優先することを確認した。

② 歌詞の伝達方法に関する悩み

歌詞の伝達は、単なる知識伝達ではなく、歌の理解や表現の深化を目的とするものであることが確認された。歌詞を覚えることは表現の基盤となるが、子どもによって理解のしやすさや習得方法は異なるため、一つの方法に固執せず、多様な手法を組み合わせることの重要性が指摘された。具体的には、絵や身振り・手振り、保育者の範唱などを活用することで、子どもそれぞれの理解を支援し、表現世界を広げることが可能となる。

③ 練習過程に関する悩み

子どもの表現力を育むためには、実体験を中心とした活動によりイメージを豊かにすることが重要であることが確認された。多様な経験の提供が表現力の向上に資するため、豊かな保育環境の整備が不可欠であると保育者間で共通理解された。

表 1：6月23日の対話の内容「音楽活動を行う際（子どもへの指導）の悩みについて」

	保育者が出した悩みと対話で導かれた意見		著者の解説	
	項目	保育上の課題・配慮	具体的指導・環境設定	教育的意義・考察
技能・発声に関するもの	発声	歌唱時に大きな声を出す／声を出しにくい子どもへの対応	日常生活での声の多様性に着目。挨拶・会話・笑い・泣きなどの声量を体験させ、生活の中で声のコントロールを促す 大声を出す理由は声のコントロールの難しさや、承認欲求の表れではないか	歌唱における表現の基礎となる声の理解を促す。承認欲求を満たしつつ自己調整力を育む
		歌唱意欲	歌うことに消極的な子どもへの対応	「歌わせる」のではなく、生活や遊びを通して歌いたくなる体験を提供
歌詞の伝え方	歌詞理解	子どもによって理解の容易さが異なる	絵・文字提示、範唱、身体表現など多様な方法で歌詞を伝える。生活・遊びを通じた言葉理解を重視	抽象解説ではなく、体験を通じた意味理解を促すことで表現力向上
	活動目標	歌唱の到達度をどこに設定するのか	保育者が到達度を線引きするのではなく、子どもの表現を深めるために豊かな生活経験を提供	表現の可能性を拡張し、創造性を育むためにも、生活経験を重視
能動的な練習に	活動の持続	長期的に飽きずに歌唱活動に取り組む困難さ	遊びを多角的に展開し、歌を様々な角度から楽しめる環境を整える	長期的に飽きずに遊び込む工夫がイメージの蓄積や表現力・創造力を育成。生活や遊びと歌唱活動の並行が音楽表現の深化に寄与

以上の方向性を踏まえ、年度を通して音楽遊びが実践された。年度末の音楽会に向けても、保育方針が継続され、音楽会の練習が開始する12月中旬からは歌唱活動を支える多様な遊びを、友達との関わりや歌詞の世界観を体験的に理解可能となるよう保育構成した。

3. 2 具体的実践の姿から（12-2月音楽的表現の深化）

本節では、保育者が技能面・歌詞の伝達・練習の積み重ねに着目し、幼児とともに体験した《ゆげのあさ》を題材とする生活に根ざした保育事例を取り上げる。音楽会に向けた活動の方向性を子ども中心に据え、実体験の蓄積を重視したが、保育者の指導意図と子どもの表現の変容を観察することで、生活に根ざした音楽活動の教育的意義を述べる。

3. 2. 1 技能・発声に関するもの

事例1 寒い日に「ホー」

園庭に出て遊ぶと、息が白くなる。「これがゆげだよ」と、保育者から教えてもらう。「わあ鼻からもでるよ」と歌の歌詞と同じ状況を何度も繰り返す。

歌詞には「鼻から口から ぽぽぽ」とあり、子どもが鼻からも湯気が出ることに気付く契機となる。歌唱は朝の会後に行われ、初期段階では保育者の模唱を聴く中で歌詞理解は限定的であったが歌唱体験を重ねた。その後、実体験を通して表現を豊かにすることが試みられた。戸外活動では寒冷時に白い息が見られる現象を経験し、「ゆげ」の具体的理解につながった。辞書的な語義伝達ではなく生活体験を通した言語理解である。外遊びでの鼻や口から出る息の観察によって、子どもは歌の世界を実感し、自発的な歌唱意欲を高めた。6月研修で確認された「楽しい体験を用意し、歌いたい気持ちを引き出す」という方針の具現化である。

事例2は、ゆげ遊びから発展して、汽車になって遊ぶ場面である。

事例2 年中さんの部屋まで汽車になって行こう

初めは目的もなく汽車ごっこを行っていたが、「一番遠くのお部屋まで行ってみよう！」と保育者が提案したことで子どもの中に目標ができた。《ゆげのあさ》を歌いながら、友達と長い距離を移動する。徐々に歌のリズムと歩調が合う姿が見られ、歌と動きが一致する。

事例2では、《ゆげのあさ》の歌唱体験が遊びと結びつき、汽車ごっこへ展開した。年少児にとって友達と連結して歩くのは容易ではなく、当初は個別的活動であったが、絵本等を通じて得た知識を基盤に腕の動作を模倣し、次第に連結遊びへと発展した。この過程で、歩幅や歩調を調整しながら長距離を歩く試みが、リズムの同調や拍感の形成に寄与したと考えられる。複数で「汽車」を構成し、歌唱と歩行を同時に行う経験は協働的音楽活動を促進し、Vygotsky (1978) の指摘する「社会的相互作用を媒介とした発達」を裏付けるものであった。

汽車遊びでは歩幅調整を通して時間・空間を共有する協働的行動が生じた。また、保育者の「一番遠くのお部屋まで行ってみよう」という言葉かけは遊びに目的を与え、主体的挑戦を促す契機となった点で、6月の対話における「保育者が到達度を線引きするのではない」という課題に応答する実践といえる。

さらに、遊びの継続に伴い、歌詞「ぼぼぼ」の発声が「ぼっぼっぼ」と軽快さへ変容したことは、身体的遊びを通じたイメージの深化が表現の変容を導いたことを示す。他者との音楽活動は、歩行速度を揃える・同時に止まるなど身体的協調を促し、協働性と音楽表現力を統合的に育む重要な場となった。

事例3 年中（4歳児）さんと一緒に歌おう

汽車ごっこでいくつも先の保育室にたどり着いた。年中組の子どもたちが快く歓迎してくれたこともあり、それまでの経緯を伝えた。すると、年中組の子どもたちが《ゆげのあさ》の歌に興味を持ったため歌ってあげると共に、年中の歌も聴かせてもらうことになる。聴いてもらえる相手がいることで、お互いに、にこやかな表情となる。

年少児は、年中組の教室に移動すること自体が幼児にとって大きな経験である。年中児に対して《ゆげのあさ》を聴かせる体験や、年中児の歌を聴取する機会を提供することは、音楽的・表現的発達において重要な経験となる。異年齢の表現交流により、幼児は自己表現との差異を認識し、音の美しさ、音楽の面白さに対する感覚を獲得し得る。

また、保育者は、6月の対話の中で議論された「大きな声を出す子どもは承認欲求の表れ」という予測を踏まえ、学年を超えて音楽を聴きあう経験を計画した。このような経験により、聴いてほしいという承認欲求が適切に満たされると、集団で歌うことが定着し、叫び声は減少する。さらに、遊びを通じて承認欲求を満たしつつ、「一人だけ頑張らなくてもよい」「お友達の声も聴きながら歌おう」という声かけを行うことで、幼児の声が混ざり合い、協調的な音楽活動が促進された。

3. 2. 2 歌詞の伝え方

事例4 氷もできる寒い日

明日は寒波が来る、という日、保育者はいろいろなゼリーの容器に水を入れる。明日は子どもたちが凍っているのを見つけるだろうかとワクワクする。きれいなキラキラと光沢のある光る紙を小さく切り、水の上に浮かばせて明日を待つ。次の日、子どもたちは園庭にて「はー」と息をだす。寒波の日は真っ白になる。水ができているのを見つけ、「冷たーい」と言いながら楽しそうに氷に触る。

《ゆげのあさ》に関連して実施された氷づくりの活動は、氷が出来る程低温な日はゆげもで

きるといふ自然現象の関連性を印象付ける機会となった。本活動を契機として、冬季の自然環境を直接体験し、自然の変化を実感する経験を獲得した。本活動においては、歌詞の意味を逐語的に解釈させるのではなく、歌が喚起する世界観の享受が重視された。さらに、この歌唱活動を反復する過程において、幼児は冬の寒さや氷遊びの記憶を想起し、それに伴う感情的反応（イメージの膨張、笑顔の表出）とともに音楽を受容することが観察された。これにより、音楽的表現は単なる発声活動にとどまらず、季節的自然体験と不可分に結びついた豊かな表現行為へと発展することが確認された。

事例5 氷で発見

氷づくりの材料として、紙やビーズ、ドングリ、さまざまな形や大きさの容器を設定した。それらの材料を使い、思い思いに氷づくりに取り組む。寒波の日、氷で遊ぶ子どもが不思議を発見した。「きらきら光る紙が全部上にある！」「きらきら光る紙はどうして沈まないの？」と疑問を持つ。各保育室の制作コーナーから新しいカップを持ってきたり、園庭から枝などを持ってきたりして、思い思いの氷づくりに励む年長児の姿を見て、一生懸命年少児も真似をする。

氷遊びにおける観察から幼児は自ら素材を選択し、結果を予測しながら試行する姿が見られた。遊びの起点は年長児の模倣であったが、次第に自らの遊びへと発展した。氷の不思議さや、水に浮くものと沈むものの違いに気づく経験は、不思議を追求する楽しさの基盤となった。さらに、年長児との縦のつながりが充実することで、音楽活動においても年長児の表現の観察から、年少児が独自に表現の探究を試み、ゆげの世界を満喫する経験へと繋がった。

保育者は、6月の対話を踏まえ、歌詞の内容を表現する遊びを準備しつつ、「子どもがその中から自由に好きな遊びを選択できる」ことを重視した。この方針の下で、さまざまな冬の遊びや素材を用意することで、幼児は自発的に遊びを展開し深化させることが可能となった。

また、異年齢間での遊びを促進することで、他学年の遊びを観察する機会が増え、遊びの理解や表現がさらに深まった。保育者は直接教えたり指示したりするのではなく、幼児が自発的に遊びを広げ、探究する環境を整備した。その結果、幼児は冬の寒さを体感しながら遊び、白い息を出して活動するなど、季節感豊かな経験を獲得した。

事例6 ゆかいてなあに？

子どもたちの歌う表情を見て、保育者が「歌の最後の愉快って何だろう？」と問いかけた。その声掛けを契機に、みんなで「愉快」について語り合う。いろいろな遊びをする中で、「楽しい」や「大笑い」などを言葉にした。さまざまな似た表現の言葉を集め、そのイメージを実際に遊びの中で表現し合った結果、クラスで「愉快」の表現を共有していた。

対象楽曲の歌詞に含まれる「ゆかいだな」というフレーズに関して、幼児は当初、「ゆかい」

の意味を理解できなかった。そのためフレーズを適切に収めることができずに強く雑な発声が観察された。しかし、保育者が「よーし、愉快的な遊びをしよう！」と積極的に言語的介入を行い、言葉の意味をまだ十分に理解していない幼児に遊びの文脈において「楽しいね」「今の感じが愉快だよ」と随時実践においてフィードバックを行った。「ゆかい」の意味は「楽しく心地よいこと」とされるが（広辞苑）、意味が定かでない段階では、歌詞と感情が結びつかず、表現の理解が限定的であった。しかし、保育者の工夫により、幼児は遊びや実体験を通して言葉の意味を理解するとともに、感情と歌詞を結びつけることができた。このような経験を通して、幼児は自らのイメージを深め、言葉を獲得し、音楽的表現の豊かさを育むことが確認された。体験を通して、頭と心で意味を理解し、歌唱の表現が次第に整い、フレーズが適切に収まり、表現が滑らかなものへと変化した。

3. 2. 3 能動的な練習過程に向けて

音楽活動においては、技能的な基盤を積み上げることが必要である。幼児が「このように歌いたい」という目標を持った際、現状の音楽力との差異は、練習によって埋めるべき技能として捉えることができる。しかし、対象年齢が低いほど、この差を明確に意識させることは困難である。保育者が「音楽会のため」「保護者の方が楽しみにしている」などの外的動機を与えても、幼児が日々の歌唱活動の意味を十分に理解することは難しい。日々歌うための動機付けは、歌そのものや歌に関連する遊びの楽しさにあると考えられる。

6月の対話において、保育者らは「いろいろな角度から楽しめるように環境を整える」と考え、遊びの中で歌を自然に取り入れる工夫を行った。例えば、息が白くなる冬遊びを繰り返す中で、開口時間が長くなることに伴う乾燥や白いゆげの発生条件について、幼児は興味を持ち、実際に試行しながら考えを交換する姿が観察された。保育者は即座に答えを与えるのではなく、子どもたちの発見や意見を尊重しつつ共に考える姿勢を示した。

このような日々の保育過程において、幼児は互いの気づきや発言、表現を受け止め合いながら仲間関係を形成する。これにより、音楽表現活動においても、歌唱と共に現れる身体表現においても、お互いの表現を認め合う協調的な関係構築へと繋がることが確認された。

事例7 ゆげが消えるのはなぜ？ どうやったらたくさん出る？

ゆげを出す遊びが楽しくなり繰り返す。何度も何度も「はー」と息を出す子どもたちだが、だんだん息が白くならなくなる。「なんで？」との疑問に、保育者が口を閉じてくちゅくちゅとしてから「はー」とするとまだゆげが出た。それを見てクラスで「くちゅくちゅ、はー」が流行る。

集団教育において望まれる音楽活動は、他者と音を社会的に共有する経験として位置づけられる。この特性は、特定の楽器に対する個別指導を中心とする習い事としての音楽と性質

を大きく異にし、集団的相互作用の中で成立する点に特徴がある。

幼児期、とりわけ年少児は、音楽以外の活動を通して他者と関わり、クラスとしてまとまりを形成し始める時期にあたる。直接音楽に関係していないような遊びでさえ、こうした経験には意義が認められ、さらに音楽活動においても他者と音を共有することの意味を体感する様子が観察された。歌唱表現の際の身体的動きや、曲内の「ほら犬も」という部分の歌唱においても、犬の手の動きを付けながらスタカート気味に歌う子どもや、言葉を重視するようにスラー気味に歌う子どももいる。それぞれの世界観を尊重しつつ自己表現を行いながら、他者の表現と融合することで一つの音楽を創り上げる。3歳児の遊びの中で展開される世界観とも通じるものである。以上の点から、幼児期における集団的音楽活動は、社会的関係性の発達と不可分に関連していることが示唆される。

3. 3 保育者の振り返りに基づく音楽活動の意義（3月）

本研究園の音楽会では、「はなからくちから」で手を鼻や口に指さす動作、「おはよう おはよう みんなおいで」で手招きする動作、「きしゃぼっぼ」における多様な汽車の表現など、個別性に富む活動が見られた。この多様性は単なるばらつきではなく、日常の遊びや経験を通じて培われた声のまとまりや遊びの充実度に支えられており、過度に大きな声や怒鳴り声は確認されなかった。

音楽会後には、6月の振り返り同様、全保育者によるKJ法を用いた振り返りを実施し、音楽会が幼児の育ちに与えた意味を整理し、グループごとに言語化することで、音楽会に向けた取り組みの意義を再認識する場となった。以下に保育者の振り返りの一部を示す。

- 1 保育者は、生活の中で子どもと同じ時間を過ごす仲間として、対等な関係性を重視していた。歌わせる、遊ばせるという一方的な指導ではなく、子どもと共に悩みながら日々を過ごし、遊びや歌を深める姿勢を示した。歌唱時には、汽車遊びに合わせて保育者も一緒に汽車になり、アカペラで歌唱しながら活動した。部屋でピアノを使用する場合でも、それは子どもの歌唱を支援する補助であり、大人の力で歌わせるための道具ではなかった。
- 2 歌詞の伝達は機械的に教えるのではなく、実体験を基盤とした生活の中で伝えることで、幼児が喜びながら歌う姿が見られた。生活体験の中で疑問や興味を引き出しながら、各幼児が歌唱のためのイメージ形成を担うことで楽しみながら歌う姿が実現された。
- 3 保育者は、日常の活動の豊かさが音楽的発展につながることを実感していた。実体験を中心とした保育により、家庭においても園での体験を話すなどの経験が深まり、生活全般での学びが音楽活動に反映されることが示された。
- 4 生活に根ざした音楽活動の中で、保育者は常に幼児に対等に向き合い、共に活動する姿勢を保持した。その結果、幼児の主体性が発揮され、心の育ちが促進された。共に笑い、

楽しみ、悲しみ、悩む経験を通じて、音楽表現に必要な情緒的成長も得たと考えられる。音楽を生活の一部として捉え、保育者が活動の中で直面する課題を幼児の育ちとして捉えることで、実際の音楽活動は豊かさを増す。時間をかけ、多様な育ちにアプローチすることが、幼児にとって〈豊か〉な音楽経験を生み出すと考えられる。

4 結論

本研究では、音楽会に至る過程において、日常生活および保育生活を重要視し、音楽の生活化を実現することを試みた。年間を通して保育者が行った対話と協働の実践を分析し、その教育的意義を検証した。

保育者は、春の段階において、理想的な音楽教育の形を描くことが可能であった。その理想を実現するためには、音楽会の成果に焦点を当てるのではなく、日常の保育活動における方向性を重視する必要があると認識した。そのため、保育者間での対話や研修の場を設けることで、最終的成果に囚われることなく、保育の方向性を維持することが可能となった。

本研究園における音楽活動では、保育者が幼児に対して対等な関係性を重視し、単なる指導者としてではなく共に悩み、遊びや歌を深める姿勢を示していた。さらに、歌詞の伝達は機械的に行うのではなく、幼児の実体験に基づく無理の無い生活を軸に行われた。その結果、幼児は歌唱のイメージ形成に主体的に関わり、繰り返し歌う姿が観察された。生活体験を通して疑問や興味が喚起されることで、幼児一人一人の表現や創造性が促進された。加えて、日常活動の豊かさが音楽活動の発展に寄与することも示唆された。実体験を中心に展開される保育により、保育者と幼児、また幼児同士の関わりが活発になり、経験の深化が見られた。また活動中に得た気付きや疑問を仲間と共有することで、生活全般における学びが音楽活動へと反映された。

最後に、生活に根ざした音楽活動の中で、保育者が幼児に対等に向き合い共に活動することにより、幼児の主体性が発揮され心の成長が促進された。共に笑い、楽しみ、悲しみや悩みを経験する過程を通して、音楽表現に必要な情緒的成長も得られることが示され、幼児期の音楽活動の教育的意義が一層明確化された。以上のような活動の実現にむけ、担任保育者一人に任せるのではなく、園全体としての対話と協働が不可欠であるといえる。

今後の研究課題としては、多忙な保育者の対話時間の確保や、教材と生活をどのように展開していくかについて、継続的な検討の余地があると考えられる。

【引用文献】

- 岩田京子 (2023) 「幼児が主体となってわくわくしながら園行事を楽しむには」『幼児教育じほう』51 (6), p.22
- 大豆生田啓友 (2023) 「保育の質向上につながる魅力ある園行事——「例年、同じ活動」からの脱

- 却のために」『幼児教育じほう』51 (6), p.6
- 乙部はるひ (2022) 「幼稚園における生活発表会に関する一考察」『帝京大学紀要』33, 帝京大学, p.160
- 倉橋惣三 (2008) 『倉橋惣三文庫① 幼稚園真諦』フレーベル館 p.26
- 中村礼香 (2018) 「表現活動を通して育まれる資質・能力——音楽表現活動に視点をあてて——」『鹿児島女子短期大学紀要』第54号 pp.69-73
- 新村出編著 (2018) 『広辞苑』第7版, 岩波書店
- 文部科学省 (平成29年) 『幼稚園教育要領解説』p.178, pp.193-194
- 吉永早苗・虫明淑子・伊藤理絵等 (2018) 「幼児教育における『発表会』の意義とそのあり方を考える——幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を視点として」『日本教育心理学会第60回総会発表論文集』p.102
- Vygotsky, L. S. (1978) . *Mind in society: The development of higher psychological processes*. University College London Press. p.24

【謝辞】 研究に際しご協力いただきました緑ヶ丘幼稚園の園長先生はじめ諸先生方に感謝申し上げます。また主任である橋本弘美先生には、事例選出や、研修等でお力添えいただきましたことに深く御礼申し上げます。

